

公開講座

恋する山川登美子

平成30年9月15日(土) 14:00~15:30 / 会場 B101

幼児教育学科 教授 前田 敬子

今年度初めて山川登美子講座を開催し、歌の特徴を紹介し、特にその恋の歌に焦点を当てました。

『明星』の女流歌人山川登美子が、鳳晶子(後の与謝野晶子)とライバル関係にあったことは広く知られます。一つには歌の、他の一つは恋のライバルです。晶子の『みだれ髪』は六章に分かれ、そのうち一つの章は登美子を歌う章なのです。登美子は父の薦める縁談で結婚、一旦『明星』を離れます。そのため「それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ」の一首は、晶子に「紅き花」を譲り自ら身をひく登美子の象徴のように語られます。しかし、その解釈は、その後の人生の明暗を反映させすぎるものです。なぜなら、この歌は「住の江」で詠まれたもので、「忘れ草」とはその地にちなんで詠み込まれたものにすぎないからです。高校古典で学ぶ土佐日記「忘れ貝」も住の江の話、住の江だから「忘れ貝」を詠むのです。したがって、登美子の歌も同様に「住の江にて摘める草にそへて」の添え書きとともに解釈されるものです。そもそも歌を詠んだ時点で「私は鉄幹先生を晶子さんに譲る」などと登美子が意図するものでしょうか、鉄幹には妻の瀧野がいました。瀧野が男子を出産した祝い歌を、晶子も登美子も残しているほどです。晶子の華々しい『みだれ髪』刊行もまだ先の話です。

登美子の生涯唯一独立した歌集『恋衣』は、与謝野晶子、増田雅子と三人の合同詩歌集です。登美子の章「白百合」の冒頭「髪ながき少女とうまれしる百合に額は伏せつつ君をこそ思へ」の歌は、清楚で西洋的なイメージを醸し出していますが、この歌は登美子の日常生活



写真1 『明星』第六号～八号、第十号の表紙、一條成美の画

活を詠んだ歌というよりも、『明星』表紙絵(写真1)を歌ったように見えます。他にも「せめてただ女神の冠しろ百合の花のひとつと光そへむまで」は、『明星』に模写されていたミュシャの絵(写真2)を詠んだように見えます。

伝統的リズムを大胆に破る歌もあります。「木屋町は火かげ祇園は花のかげ小雨に暮るゝ京やはらかき」「地にわが影空に愁の雲のかげ鳩よいつこへ秋の日往ぬる」「くちなはの口や狐のまなざしや地の上二尺君は寵の子」など、冒頭に対句を置



写真2 『明星』の挿絵

く漢詩あるいは四行詩に似ています。このすぐ後に石川啄木が三行分かち書きの短歌を発表しますが、それにつながる破調の要素をもつのです。

もともと、この新しい試みも、登美子一人では成し遂げられなかったものでしょう。『明星』を出した結社名「新詩社」とは文字通り「新しい詩」の創造を意味し、機関紙『明星』も西洋絵画や訳詩を載せるなど、西洋の新しいことを志向するものでした。登美子は大いに触発されていたでしょう。

そして、『明星』における登美子のはたらきは、晶子とは異なる美を描くことだったかもしれません。歌に詠まれる植物の歌を数え上げると、登美子では百合の歌が最も多く、「白百合」131首中10首です。晶子には牡丹、雅子には梅の歌が多く、再版では更に強調されて、三者三様の異なる魅力を醸し出すように、鉄幹が背後でイメージ調整を図った節があります。

『恋衣』には晶子の詩「君死にたまふことなかれ」も含

まれています。その詩が初めて『明星』に発表された後、国家への反逆として世間から大いに非難されたにもかかわらず、再度『恋衣』にも収められたのです。『恋衣』は当時の社会では、危険思想の詩歌集と見られたはずで、登美子「白百合」の章の最終部分にも反骨精神が表れています。晶子らと仲間になって歌を詠むことを大学から咎められたことに対する憤りの歌が並べられているのです。現代の目から見ると、そこにあるのは、徒な反抗心でなく、平和で自由な世界への憧れ、生命感あふれる原初的な美、若く瑞々しい夢や情熱の発露に見えるのですが。

では、登美子の内側から湧き出る、歌の個性とはどのようなものだったのでしょうか。同時代評によると、「熱烈（激越の調）」「はげしさ」と表現されています。鉄幹も（登美子の死後に）「その人は我らが前に投げられし白熱の火の塊なりき」「口疾にも胸刺す歌のはげしさに人驚かす君なりし君」と激しさを指摘しています。歌の例を挙げると、「わが息を芙蓉の風にたとへますな十三絃をひと息に切る」と自らの内面の激情を歌う他、「狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき風にむかはむ」「今の我に世なく神なく仏なし運命するどき斧ふるひ来よ」など、思うに任せぬ人生を呪うような歌があり、その小刻みに畳みかけるリズムも内容の激しさに合致しています。このように気性の激しさを伝える歌が少なくないのです。

登美子の晩年、病苦の歌は痛切に胸に迫るものです。「胸たたき死ねと苛む嘴ぶとの鉛の鳥ぞ空掩ひ来る」「わが柩まもる人なく行く野辺のさびしさ見えつ霞たなびく」「後世は猶今生だにも願はざるわがふところにさくら来てちる」など、苦しみを芸術の高みに昇華して余人の追従を許さないものでしょう。

登美子は胸部疾患のため、二十九歳で世を去ります。晩年、熱を帯びた息とともにこぼれ出たような恋の歌が何首も見えます。「おもひつりのりつのはびこり大木の日を蓋うさまに君おもひけり（あなたへの思いがつのって、困ったことに、はびこって大木にまで成長し、遂に太陽を隠してしまった、そんなほの暗さのなか、私はあなたを愛している）」というのです。「はびこる」のもつ「育っては困るものが育ってしまう」語感が生きています。ところが、『明星』に掲載されたのは「ものおもひ二葉のほどと見たりしに大き木となり日を掩ふかな（二葉のように小さかった物思いが、いつしか大木となり太陽を隠すまで

になった）」でした。この直しは、果たして登美子自身によるのか鉄幹によるのか。私には、登美子自身が直したとは思えません。なぜなら、原作「おもひつりのり…」にあった、当人に制御できない恋愛のやるせなさが、すっかり抜け落ちてしまったからです。

登美子さん、あなたは先生にただ伝えたかったのでしょうか？ なのに当の先生は、すっきりと整えてしまった。いつものながらの鮮やかな手腕で。

「あゝいはん君を恋しとなつかしと人たらずんば人たらずよし（もう隠さずに言いたい、あなたのことが恋しくてたまらない慕わしくてならないと。恥知らずだと言われても、もう構わない）」という歌もあります。焰の中を駆けつける愛しい人の幻を「君はきぬ焰の波をかいぐりもゆるさんごを浮木にとりて（あなたは炎をくぐりぬけ、燃える珊瑚を踏んで、果敢に私に会いに来てくれた）」と思い描く歌もあります。登美子の病は熱を伴いました。鉄幹と出会って間もない頃、互いに焰をモチーフに詠み合った痕をたどることができるため、この「君」も鉄幹の姿ではないのでしょうか。登美子の「ほほゑみて火焰も踏まむ征矢も受けむ安きねむりの二人いざ見よ」はそのときの歌です。

登美子の死後「トキハギ」に鉄幹と晶子は登美子を悼む歌群を載せました。鉄幹の歌「わが為に路ぎよめせし二少女一人は在りて一人天翔る」は、鉄幹にとって登美子が晶子同様に重要な存在であったことをうかがわせます。「すずしかる御瞳も見ゆうつぶしてぬれし頬も見ゆ前髪も見ゆ」は、登美子の愛らしい姿を詠んでおり、この歌を見せられた晶子は心中穏やかでなかったことでしょう。一方、晶子の歌は「挽歌の中に一つのただならぬことをまじふる友をとがむな」「亡き人を悲しねたしと並べ云ふこのわろものを友とゆるせし」など、登美子が私を「とがむ（咎める）」だろう、私は登美子のこと「ねたし（妬ましい）」という複雑な心境を表すものです。

※公開講座の折には、拙稿「『恋衣』再版の意図」（お茶の水女子大学国語国文学会『国文』2015年12月）、「創られた山川登美子像」（福井大学言語文化学会『国語国文』2017年3月）、「『花のちり塚』裏表紙不明文字の判読」（日本近代文学会『日本近代文学』2018年11月）を元に、多くの歌を挙げ、話も多岐にわたりましたが、紙幅の都合上、再構成しました。